

大学入学共通テスト 分析資料（令和三年度）

広島なぎさ中学校・高等学校長 永尾 和子

第1問 評論

■ 出典

香川雅信『江戸の妖怪革命』（二〇一三年・角川学芸出版）

■ 作者・作品紹介

香川雅信（かがわ まさのぶ）

一九六九年生まれ。香川県出身。一九九九年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。二〇〇六年、総合研究大学院大学から、日本で初めて「妖怪」をテーマとする論文によって博士号を取得した。博士論文は、「日本人の妖怪観の変遷に関する研究…近世後期の『妖怪娯楽』を中心に」というタイトルで、近世及び近代において、日本人の妖怪に対する認識が大きく変化したことを明らかにすることを目的としており、今回出題された「江戸の妖怪革命」は、この論文の内容を、平易な表現で書き著したとも言える。

現在の職は、兵庫県立歴史博物館学芸課長兼県立美術館課長。所属の博物館での展覧会の他、国内外での講演活動も積極的に行っている。専門は日本民俗学で、研究テーマは「妖怪」と「玩具」。兵庫県立歴史博物館のホームページに掲載されている本人の自己紹介から、妖怪研究における香川雅信独自の視点を読み取ることができる。「（前略）私は『妖怪がいるかないか』

を研究しているのではなく、むしろ『いない』ことを前提に、『人間はなぜ、妖怪を必要としてきたのか』を研究している（後略）。」

著作に、「江戸時代のお化け屋敷」（『怪』第四〇号 二〇一三年 角川書店）、「伝承から表象へ…現代妖怪イメージの期限」（『ユリイカ』七月号 二〇一六年 青土社）、「予言するモンスターたち…アマビエ、人魚、件、そして」（『KADOKAWA 文芸 Web マガジン カドブン』二〇二〇年 KADOKAWA）他多数。

■ 本文解説

出典は二〇一三年、角川学芸出版から出版された角川ソフィア文庫の一冊である。本文は、序章「妖怪のアルケオロジの試み」から、第二節「妖怪研究の二つのレベル」の終わり四段落、第三節「アルケオロジという方法」の全文、第四節「妖怪観のアルケオロジ」の最後数行を除くほぼ全文を採っている。

筆者は、妖怪に対する認識の変容をミシェル・フーコーの「アルケオロジ」の手法をふまえて記述しようとする。そして、中世における妖怪は、神霊からの「言葉」を伝える一種の「記号」として存在していたという。あらゆる「物」は、「物」そのものではなく、神霊から意味を伝える「記号」であり、人間はその記号を読み取ることしかできなかった。

しかし、近世に入ると、「物」から「言葉」や「記号」が剥ぎ取られ、「物」

は「物」そのものとして人間の目の前にあらわれ、記号は人間が約束事のかで作出せるものとなった。人間の支配下に入った人工的な記号を、筆者は「表象」と呼ぶ。こうして、意味の世界から切り離され、キャラクター化した妖怪は、人間の娯楽の題材と化していったのである。

ところが、近代に入ると、「表象」という人工的な記号を成立させる前提であった絶対的な人間の力が揺らいできた。人間は、自らを、「内面」というコントロール不可能な部分を抱えた存在として認識するようになる。その認識とともに生み出されたのが、近代特有の「私」という思想である。謎めいた「内面」を抱え込んだことによって、「私」は私にとって不気味なものとなり、妖怪は再び神秘的な存在として、人間の中に棲みつくようになった。アルケオロジやエピステーマなどの耳慣れない言葉や「記号」「表象」「認識」など評論特有の語句が多く用いられているが、要点は極めてシンプルである。妖怪に対する認識が、近世と近代において二度変容した歴史的背景について、「記号」と「表象」というキーワードを用いて説明した文章である。

文章量は、昨年の約三二〇〇字とほぼ同じ約三三〇〇字であるが、第五問に芥川龍之介の『歯車』を含む約五〇〇〇字の文章が含まれており、これを加えると約三八〇〇字となる。それでも一昨年の四二〇〇字よりは少なくなっている。設問形式も問5以外はほぼ従来の形を踏襲している。

漢字の選択肢が五択から四択になり、選択肢が素直で紛らわしいものがない。推測するに、試行問題ほどではないにしろ、新傾向の出題方式を取り入れ、複数の情報を読み取る問題となっているので、解答に時間がかかることを想定したのではないか。受験生に配慮したと思われる。本文は単一の文章であり、設問の作り方もほぼセンター試験を踏襲しているので、従来通り、設問毎に選択肢を本文と照合していけば、容易に正解を導くことができる。全体としてそれほど難しい問題ではない。

【文章の流れ】

【第一段落】妖怪についての問い

① 第一の問い

「フィクションとしての妖怪、とりわけ娯楽の対象としての妖怪は、いかなる歴史的背景のもとで生まれてきたのか。」

② 妖怪がフィクションとしてとらえられたのは近世中期

フィクションとしての妖怪という領域の歴史性（事物に対する認識や思考が変容するということ）を示す

③ 民間伝承としての妖怪

日常的な因果了解では説明のつかない現象

不安と恐怖⇨意味論的な危機

・妖怪は人間が意味世界で生きるための必要性から生み出された文化的装置

・切実なリアリティをとまなう。

④ 妖怪に対する認識変容の必要性

妖怪が意味の体系の中にあり、リアリティを帯びた存在である限り、妖怪をフィクションとして楽しむという感性は生まれない。

フィクションとしての妖怪という領域が成立するためには、根本的な認識の変容が必要

【5】 第二の問い

「妖怪に対する認識がどのように変化したのか。そしてそれは、いかなる歴史的背景から生じたのか。」

【第二段落】アルケオロジーの手法

【6】 ミシェル・フーコーの「アルケオロジー」の手法を援用

【7】 アルケオロジーとエピステーメー

アルケオロジー＝思考や認識を可能にしている知（エピステーメー）の変容として歴史を描く試み

【8】 フーコーの「知の変容」

「物」「言葉」「記号」「人間」の関係性の再編成

人間が世界を認識するうえで重要

【9】 アルケオロジーによって記述する日本の妖怪観

妖怪観の変容を「物」「言葉」「記号」「人間」の布置の再編成として記述する試み

日本の妖怪観の変容を文化史的変動の中で考えうる

【第三段落】日本の妖怪観の変容

【10】 日本の妖怪観の変容をアルケオロジーの手法によって再構成する。

【11】 中世の妖怪

妖怪に限らず、全ての「物」は神霊からの「言葉」を伝える一種の「記号」＝所与のものであり、人間はそれを読み取るだけ

【12】 近世の妖怪

近世における妖怪に対する認識の変容

「物」にまわりついた「言葉」や「記号」としての性質が剥ぎ取られ、「物」が「物」そのものとして人間の目の前にあらわれる

自然認識、本草学が成立し、妖怪が嗜好の対象となる。

【13】 記号と表象

中世：「記号」は所与のもので、人間は読み取るだけ

近世：「記号」は人間が約束事のなかで作り出せる。

人間のコントロール下に入った人工的な記号

＝
「表象」

【14】 妖怪の「表象」化

「表象」は意味より、形象性、視覚的側面が重要な「記号」

＝
現代でいうところの「キャラクター」

リアリティを喪失し、フィクショナルな存在、娯楽の題材へ

妖怪の「表象」化：人間の支配力があらゆる「物」に及ぶようになった

←
この帰結

15 近代の妖怪

妖怪が以前とは異なる形でリアリティの中に回帰する

16 「人間」の内部に棲みつく妖怪

近代になり、「人間」に根本的な懷疑が突きつけられる

=

「内面」というコントロール不可能な部分を抱えた存在と認識されるようになった。

17 「私」を投影した存在としての妖怪

近代特有の「私」という思想

謎めいた内面を抱え込むことで、「私」は私にとって「不気味」な存在であり、一方で神秘的存在となる。

←

18 「以上が、アルケオロジー的手法によって描き出した妖怪観の変容のストーリーである。」

【二百字要約】

日本の妖怪観の変容を、アルケオロジー的手法によって記述すると、まず中世の妖怪は、神霊からの「言葉」を伝える「記号」であり、リアリティを帯びた存在だった。近世になると「記号」は人間の完全な支配下に入って「表象」となり、妖怪も、架空の存在、娯楽の題材へと化していった。しかし、近代になり、人間が不可解な「内面」を抱える存在と認識されるようになる。妖怪は以前とは異なる形でリアリティを持つようになった。(一九九字)

■ 設問解説 ★は難易度を示す。

問1 【漢字の問題】

昨年は、抽象度の高い語彙が全くなく、日常よく使われる語句や言い回しが目立って、実用的な表現への志向が感じられた。今回は、「援用」「召喚」など、比較的語彙レベルの高いものも出題されているが、やはり一般的な漢字練習帳等には収録されない日常語が多く見られる。

訓読みの問題は昨年同様一題のみであり、平成二十二年の常用漢字改訂で加わった一九六字の中からの出題もなかった。

(ア)「ミンゾク」は「民俗」と「民族」の二つが考えられるものの、「族」を用いる熟語が選択肢の中にないので迷うことはないだろう。(ウ)「援用」は、「自分の意見を主張するために、他の意見を引用したり、事例を示したりする」の意味で、高校生が生活の中で日常的に用いる用語ではないが、評論では頻出の語であるから理解しておきたい。その他は基本的な語彙であるし、何より選択肢が一つ減って四択であるので、ここでは早く確実に得点することが重要である。

「海賊版を根絶する」「公序良俗に反する」「雨で試合が順延する」「円熟した技を披露する」など、選択肢で用いられている例文は、いずれも新聞・ニュースでよく用いられている言い回しである。昨年も指摘したことだが、昨今の傾向として、ただ単に漢字を多く覚えていることよりも、一般社会人として、新聞で用いられる語彙・漢字が読めることが要求されているように思われる。もちろん、問題集を制覇すること、漢字・語彙力は大いに高まることは間違いないが、それだけではなく、新聞・雑誌を読んだり、ニュースを聞いたりすることで、社会一般で用いられる語彙のレベルを自分の日常語に取り入れていく努力が必要である。また、日常生活の中で見聞きする語句で読み書きできないものがあれば、すぐに調べてみるなど、日頃から漢字・語彙習得の習慣を身につけることが大切である。

(ア)	ミンゾク (民俗)				
	① 所属 ② 海賊 ③ 良俗 ④ 継続				
(イ)	カンキ (喚起)				
	① 召喚 ② 返還 ③ 栄冠 ④ 交換				
(ウ)	エンヨウ (援用)				
	① 沿線 ② 救援 ③ 順延 ④ 円熟				
(エ)	ヘダてる (隔てる)				
	① 威嚇 ② 拡充 ③ 隔絶 ④ 地殻				
(オ)	トウエイ (投影)				
	① 投合 ② 倒置 ③ 系統 ④ 奮闘				
	正解は①	★			
	正解は③	★			
	正解は②	★★			
	正解は①	★★			
	正解は③	★			

問2 【傍線部を説明する問題】

傍線部Aの「民間伝承としての妖怪」の直後に、「そうした存在だったのである」と書かれている。「そうした」がさす内容は、形式段落3の内容全体と考えてよい。そこには、次のような内容が述べられている。

- ・妖怪は日常的理解を超えた不可思議な現象に意味を与えようとする民俗的な心意から生まれた。
- ・日常的な因果了解では説明がつかない現象は人間の不安と恐怖を喚起する。

・意味論的な危機に対し、人間が秩序ある意味体系の中で生きていくために妖怪が生み出された。

・それゆえ、妖怪は切実なリアリティを持つ。

これらの内容に矛盾することなく「民間伝承としての妖怪」を説明しているのは①である。

② 「フィクションの領域においてとらえなおす」が誤り。これは近世に入って、妖怪に対する人間の認識の変容を表す表現である。中世における「通

- 常の認識や予見が無効となる現象」を意味の体系に回収する存在としての「妖怪」の説明ではない。
- ③ 「目の前の出来事から予測される未来への不安」が誤り。人間は日常的理解を超えた不可思議なものに対して不安を抱くのである。
- ④ 「妖怪」は「日常的な因果関係にもとづく意味の体系」に人間を導き入れるがゆえにリアリティを持つとは書かれているが、それを「人間に気づかせる」とは書かれていないので誤り。
- ⑤ 「妖怪」は「通常の因果関係の理解では説明できない意味論的な危機」から人間を回復させるのであって、危機を人間の心に生み出すのではない。

問3 【傍線部を説明する問題】

アルケオロジーについては、形式段落の7で次のように説明されている。

「思考や認識を可能にしている知の枠組み——「エピステーメー」(ギリシャ語で「知」の意味)の変容として歴史を描き出す試みのことである。」

そして、「エピステーメー」とは、「事物の秩序を認識することを可能にする知の枠組み」であり、その知の枠組みは時代とともに変容すると述べられている。

このことを正確に説明しているのは、②である。

① 「エピステーメー」は人間が事物のあいだにある関係性を認識する仕組みであって、「ある時代の文化事象のあいだにある関係性」を理解する方法ではない。また、「その時代の事物の客観的な秩序を復元し」は、本文では述べられていない内容である。

③ 「物」「言葉」「記号」「人間」の関係性によって知の枠組みが変容するさまを記述するのがアルケオロジー的手法である。「さまざまな文化事

象を『物』『言葉』『記号』『人間』という要素ごとに分類して整理し直すことで、知の枠組みの変容を描き出す」のではない。

④ 「ある時代の文化的特徴を社会的な背景をふまえて分析し記述する方法」は、アルケオロジ的方法とは関係がない。また、「通常区別されているさまざまな文化事象を同じ認識の平面上でとらえること」が可能になるのはアルケオロジ的手法の結果であって、手段ではない。

⑤ アルケオロジは歴史を知の枠組みの変容として描き出す方法であって、「歴史的事象」を「接合」することでも、「大きな世界的変動」として描くことでもない。したがってこれも誤り。

問4 【傍線部を説明する問題】

正解は② ★★

「妖怪の『表象』化」については、形式段落①②③④で説明されている。

中世においては、妖怪に限らず「物」は全て神霊からの「言葉」を伝えるものという意味で一種の「記号」であり、人間はその記号を読み取ることでできなかった。しかし、近世において、その認識は大きく変容し、「記号」は人間が約束事の中で作り出すことができるものとなった。こうした人間の支配下にある人工的な「記号」が「表象」である。

意味の世界から切り離され、名前や視覚的形象によって弁別される「表象」、すなわち「キヤラクター」になったことによって、「妖怪」は完全にリアリティを失い、フィクショナルな存在として娯楽の題材となった。これが「妖怪の『表象』化」である。

傍線部の内容を過不足なくとらえ、簡潔にまとめているのは②である。

① 「妖怪」が「神霊による警告を伝える役割を失うことは、人間の手で自由自在に支配されるものになったのであって、「人間が人間を戒めるための道具になった」わけではない。

③ 後半の「人間世界に実在するかのように感じられるようになった」が誤

り。「妖怪」は「表象」化することによって、「完全にリアリティを喪失したのであるから、「実在するかのように感じられる」というのは、本文の内容と真逆である。

④ 「妖怪の『表象』化」は、「人間の支配力が世界のあらゆる局面、あらゆる『物』に及ぶようになったことの帰結」であって、「きっかけ」ではないので誤り。

⑤ 人工的な記号となったことで「妖怪」は「フィクショナルな存在として」「人間の娯楽の題材となったのであって、「人間の性質を戯画的に形象した」娯楽の題材になったわけではない。

問5 新傾向 【本文の内容を理解するために生徒が作成したノートの空欄を補充する問題】

出題のしかたや設問の形式、本文とは異なる文章を大問の中に引用するなど、これまでの出題方法とはかなり異なっている。試行調査の問題ほど複雑ではないが、情報量の多さに焦った生徒もいたのではないだろうか。たとえば、(Ⅲ)の問題は、一つの設問で見開きページ全体にまたがっている。

しかし、このような問題が、果たして本当に新傾向と言えるのかどうか、敢えて疑問を呈したいと思う。

たとえば、(i)の問題は、ノートの空欄を埋めるという形式になっているが、要するに形式段落の②③④⑤に見出しを付ける問題であって、ノート作成という設定にしくなくても結果は変わらないはずだ。

こうした新傾向の問題は、「主体的、対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」による成果を問おうとしているのであろうが、そもそもアクティブ・ラーニングは、他者と協働的に学ぶことによって、自らの思考力・判断力・表現力を鍛えるものである。時としては答えのない問題について、意見を出し合い、深めていくこともある。つまり、学びのプロセスが大切なのである。しかし、テストは結果を求めなくてはならない。いくら出題形式を

工夫したところで、答えは決まっている。

そう考えると、共通テストで「新傾向」と言われる問題が出題されても、結局はセンター試験と解法はそれほど変わらないと考えておいてよいのではないだろうか。むしろ紛らわしい選択肢がずらりと並んでいて、本文の抽象度が高い長文が出題されていたセンター試験のほうが難解であったとも言える。

結局は語彙力を高め、限られた時間内に本文をしっかり読み取る力を付け、注意深く選択肢を吟味する力を身につけることが大切なのである。

(i) 本文の①②③④⑤を見出しをつけて整理したとき、②③及び④⑤の内容に相応しい見出しの組み合わせとして正しいものを選ぶ。

正解は④ ★★

第一段落では、二つの問いが示されている。「生徒のノート」ではこれを「問題設定」としている。

選択肢を見ると、①と②のⅠは同じであり、③と④のⅡも同じである。

まず、選択肢①と②のⅠは、形式段落①に述べられている問いである。Ⅰは形式段落②③の内容についての見出しでなければならないから、①と②の選択肢はⅡの見出しを見るまでもなく、いずれも誤りであることがわかる。すると、③と④のどちらかが正解ということになる。

③と④の場合、Ⅱの見出しは同じであるから、結局吟味するのは、それぞれのⅠの見出しということになる。

そこで、③のⅠと④のⅠの内容を比較すると、③の「娯楽の対象となった妖怪の説明」は、形式段落⑭まで触れられていないので、誤りである。ここで、正解が④であることがわかるようになっていく。

念のため、④のⅠ「妖怪に対する認識の歴史性」の妥当性も検証しておく。

④のⅠの見出しは、形式段落②に「フィクションとしての妖怪という領域自体が歴史性を帯びたものである」とあるし、形式段落③では、近世以

前の妖怪に対する認識を述べることによって、形式段落④の妖怪に対する認識の根本的な変容の必要性につなげている。変容することこそ歴史性であるから、形式段落③は妖怪に対する認識が変容したこと（歴史性）の根拠を示している。したがって、④のⅠの見出しは②③の内容を的確に表していると言える。

(ii) 本文で述べられている近世から近代への変化について、生徒がまとめた文章の空欄を埋める問題。

【Ⅲに入る語句】

正解はⅢ―③ Ⅳ―④ ★★

近世に人間によって作り出された「妖怪」はどのようなものであったか。中世には、神霊の「言葉」を伝える「記号」であった「妖怪」が、近世には名前や視覚的形象によって弁別される「表象」となることによって、「妖怪」は現代で言うところの「キャラクター」となり、娯楽の題材へと変容した。

傍線部の内容と矛盾しない選択肢は、③である。①と②は、中世の妖怪についての説明である。また、④は、「人を化かす」が間違っている。

【Ⅳに入る語句】

近代に入ると、どのような人間が認識されたから、妖怪は再びリアリティを持った存在として現れるようになったのか。

形式段落⑭に、人間の力の絶対性が揺らぎ、「人間」そのものに根本的な懷疑が突きつけられ、人間は「内面」というコントロール不可能な部分を抱えた存在として認識されるようになったと述べられている。

傍線部の内容に合致している選択肢は④である。

① 「合理的な思考をする」ことは、近代の特徴の一つではあるが、妖怪が再びリアリティを持った存在として人間の内部に棲みつくようになるこ

とは、合理的思考では説明がつかない不可思議な存在になったということである。この選択肢は、近代の「妖怪」の認識の説明にはなっていない。

② 「『私』という自立した人間」については、本文で取り上げられていない。近代になると人間は、容易に妖怪を見てしまう不安定な存在として認識されるようになったとある。そのような認識は、人間が自立しているかどうかとは関係がない。

③ 「人間」が「万物の霊長」として絶対的な力を持ち、「表象」という人工的な記号を成立させたのは近世である。ここでは近代の人間についての認識を問うているので、この選択肢は誤りである。

Ⅲ) 生徒が出典の『江戸の妖怪革命』を読み、その第四章に引用されている芥川龍之介の『歯車』と本文との関係を考察する問題。 正解は② ★★

選択肢は、『歯車』の引用部分の解釈と、引用した意図を説明している。三行と長い選択肢だが、このような場合は、選択肢の内容とノート3の内容を照合して、矛盾なくまとめているものを選択するとよい。

① 後半の「別の僕の行動によって自分が周囲から承認されているのだと覚った」は、『歯車』引用部分に「当惑した」とあることから、適切な解釈ではない。また、「私」が神秘的な存在であるのは、謎めいた内面を抱え込んだためであり、「他人の認識の中で生かされている」からではない。

② 『歯車』の引用部分についての解釈は客観的で、内容的に矛盾がない。また、「私」に対する解釈も、「自分自身を統御できない不安定な存在である」ことを的確に言い得ている。したがって、これが正解。

③ 「会いたいと思っていた人の前に」「別の僕が自分に代わって思いをかなえてくれた」という解釈が誤り。『歯車』の引用部分には書かれていない。

④ 「自分が分身に乗っ取られるかもしれない」という解釈が誤り。また、「『私』が『私』という分身にコントロールされてしまう不気味な存在である」も誤り。「私」が不気味な存在であるのは、「私」が支配不可能な内面を抱えた存在として認識されるからであり、分身にコントロールされるからではない。

⑤ 「自分がいるはずのない時と場所」とあるが、「時」については特に『歯車』では触れられていない。「他人にうわさされることに困惑していた」も誤り。『歯車』の「僕」は、全く覚えがないところで、別の「僕」が見かけられたことで困惑したのであり、「うわさされる」からではない。そもそも、うわさされている事実が述べられていない。

第2問 小説

■ 出典

加能作次郎「羽織と時計」（一九一八年）

■ 作者・作品紹介

加能作次郎（かのう さくじろう）

一八八五（明治一八）年石川県生まれ。一九四一（昭和一六）年没。享年五十六歳。小説家、評論家、翻訳家。

一歳の時実母が死去し、京都の伯父の家に預けられて育った。一九歳のとき、検定試験に合格し、郷里の柳瀬尋常小学校の正教員になるが、翌年上京し、一九〇八（明治四一）年、二十三歳のとき、早稲田大学文学部英文科に入学した。坪内逍遙、島村抱月、片山伸諸らに師事する。

一九一〇（明治四三）年、処女作『恭三の父』を文芸雑誌「ホトトギス」に発表、一九一一（明治四四）年、早稲田大学を卒業し、早稲田大学出版部に就職したが、二年後博文館編集部に入り、『文章世界』の編集を担当、四

年後には編集主幹となった。

一九一八（大正七）年、読売新聞に『世の中へ』の連載を開始。この作品によって認められ、作家として活躍するようになった。一九四〇（昭和十五年）年、「中央公論」に『乳の匂ひ』を発表したが、翌年クループ性急性肺炎により死去した。

長く忘れられてきた作家だったが、二〇〇七（平成一九）年、講談社文芸文庫から荒川洋治編集の『世の中へ・乳の匂ひ』が出版されて以来、再評価されつつある。

その他の著書に、『寂しき路』（一九二〇年 聚英閣）、『若き日』（新潮社 一九二〇年）、『これから』（一九二三年 近代名著文庫）、翻訳にトルストイ『三つの死』（一九一三年 海外文芸叢書）等がある。

■ 本文解説

昨年は太平洋戦争末期が舞台となっていた小説だったが、今年はさらに古く、大正時代に発表された作品である。全体は三章で構成されている。本文を除く部分のあらすじは次の通りである。

第一章では、苦しい生活の中で、仕事や子供世話に睡眠もままならぬ日々を送る「私」のもとに、かつて同僚であったW君の死を知らせる葉書が届く。それは葬儀の後で投函されたものだった。不思議に思いながら、「私」は妻にW君のことを話し始める。

第二章は、過去の物語である。前半は、雑誌の編集をする主任のW君と助手の「私」のやりとりが中心になっている。W君は、時折生活の苦しさを「私」に愁訴するものの、仕事があるだけだと諦めている。「私」は働いても生活できない給料の安さやW君のような善良な人間を商品扱いする社会に義憤を感じる。そのうちにW君は病気になる、「私」は会社の人間から見舞金を集めてWの家に持参した。後半はW君がなんとか快復し、出社するようになってからの話である。これが本文として採られている。

第三章は、「私」がついにW君の家に弔問に出かけたときのことが語られている。「私」は、やはりW君からもらった羽織を着て、時計を帯に巻いて行った。W君の妻君は、足を踏み入れることもためらうような荒れ果てた家で、病のために起き上がることもできない様子だった。「私」は無沙汰を詫び、妻君と話をするが、ふと自分を見上げた妻君の眼を見たとき、それが「私」の羽織と時計を見ているように思えて怖くなり、逃げるようにW君の家を立ち去った。

本文は、前述の通り、第二章の中盤から最後までが切り取られている。百年ほど前の作品ではあるが、登場人物の生活や人間関係、心情などは、昨年や一昨年の作品より、むしろ理解しやすいと言える。おそらく、問6の宮島新三郎の批評にあるように、内容も主人公の心情も全て「羽織と時計」に焦点化されているためではないだろうか。たとえば、たくさんの注釈から読み取れる当時の生活様式だとかW君の生活や心情だとか、「私」と妻との関係とか、生活の中で起こっている様々な事象を全てさらりと通り過ぎて、読者の意識は「羽織と時計」にこだわる「私」の自意識に向けられる。四〇〇〇字近い文章で、登場人物の生活にはさまざまな出来事が起こっているのだが、それらが全て「羽織と時計」に結びついているところは、確かに少しシュモラスでさえある。

しかし、作品全体を読み通すと、W君とその家族の貧窮の様が痛切な筆致で描かれており、それを象徴するのが「妻君の眼」である。それは「私」には、「羽織と時計」という高価なものを持つ自分を暗に非難しているように見える。「羽織と時計」は貧しさと抑圧の対極にあるもので、「私」はそれを貧しさの極みにあったW君からもらった。それゆえ「私」はそれを持つことを恩恵的債務と感じ、後ろめたさを拭えないのである。

こう考えると、ただもらっただけの「羽織と時計」にそこまで執着する「私」の自意識は、貧しさと抑圧にあえぐ庶民の生活に同情し、共感する筆者の姿勢があつてこそ生まれるものではないだろうか。

筆者は、早稲田大学出版部を経て、博文館の編集主幹を務めたが、その経験が小説にも投影されている。

■ 本文あらすじ

病気で休職中、何かと世話をしてくれた「私」に感謝したW君は御礼に紋を抜いた羽二重を送りたいと言ってきた。「私」は断ることもできず、染め上がった反物を羽織にしてもらった。

その羽織は、今でも貧乏な「私」の持ち物の中で最も貴重なものの一つである。妻は、「私」が羽織を着る毎に羽織をほめ、袴が安物なのを残念がった。「私」は羽織を着る毎にW君を思い出さずにいられなかった。

その後、「私」は転職することになり、W君が同僚から金を集めて記念品を贈ると言ってくれたので、懐中時計を買ってもらった。勤めて二年足らずの「私」に記念品を贈ることで、W君のことを悪くいう人がいた。「私」はW君が気の毒で、またその情誼に感謝したが、同時にW君の恩恵に対して常にある重い圧迫を感じざるを得なかった。

その後、W君は病気が再発し、退職してパン屋を始めたが、自分は寝たきりで店は従妹に任せ、苦しい生活を送っていることを耳にした。「私」はW君を見舞おうと思いつきながら、環境も異なってしまったことから、自然と足が遠のいてしまった。「羽織と時計」をもらったことでW君に恩恵的債務を負っているという気持ちで、W君の家の敷居を高くしていた。

「私」はW君よりもW君の妻君の眼を恐れた。時計や羽織を身につけて行けば「良人が世話して進げたのだ」と妻君の眼が言い、身につけて行かなければ、「羽織や時計をどうしたのだろう」と妻君の眼が言うような気がした。W君の所に行けない「私」は、偶然W君の妻君が従妹に遇って、見舞いに行きつけかけをつくることを想像した。

そうして三、四年が経った頃、家族で郊外に散歩に出た「私」は、W君の店の前を通り、妻に命じて鮎パンを買わせて、物陰から店の様子を窺った。

W君の妻君なり従妹なりに遇うことをかすかに期待したが、出てきたのは下女のような女だった。家が違うのかとも思ったが、確かにW君の店だった。それ以来、一度もW君の店の前を通ったことはなかった。

■ 設問解説

問1 語句の意味を問う問題

大正時代の作品とあって、「術もなかった」「言いはぐれて」のような古風な言い回しを取り上げられている。しかし、「術もなかった」は古典で「術なし」という古語を学習しているであろうし、「言いはぐれて」は、それ自体は日常的に耳にしないかもしれないが、「食いはぐれる」や「乗りはぐれる」になると、聞いたことがあるのではないだろうか。言葉は一つを知れば、そこから派生していく。それを面白いと思い、自ら言葉を広げていく努力をするかどうかで、知識の幅や深さが違ってくるのである。今回の語句の意味は、前後の状況や表現にも助けられ、比較的意思を決定しやすいと言える。入試の場合、語句の意味はあくまで辞書的な意味をきちんと把握し、勝手に拡大解釈しないことが肝要であるが、派生語の知識や文脈から推測できることなど、周辺の知識を活用することも大事なことである。それは何より、自分の言葉の世界を広げてくれるに違いない。

語彙力は、読解力・思考力の基盤となるものである。日頃から読書に親しみ、わからない言葉に出会った場合は、辞書で意味を確かめる習慣を身につけたい。

(ア) 術もなかった

正解は② ★

古語「術なし」は、「方法がない」「どうしようもない」という意味である。奈良時代には、「術もなし」と「も」を入れて用いている例が多い。現在でも、「術もない」という言い方は、少し古風な感じはするものの、全く聞かない語句ではない。

古語の知識がすっと思ひ浮かばなくても「術」という漢字は「手術」（外科的な処置をする方法）、「技術」（物事を取り扱う方法）、「馬術」（馬を扱う方法）などからわかるように、「手段・方法」を表すと類推できるのではないだろうか。ちなみに、第4問の漢文は「御術」について書かれた文章である。リード文を見れば、「御術」とは、馬車を操縦する方法であることとすぐにわかる。語句の意味の解答に直結することが、他の大問に出題されているというのも珍しいことである。

こうしたさまざまな既習事項・周辺知識をもつて選択肢を見ると、「方法」と同義であるのは、②の「手立て」しかない。正解は②である。

(イ)「言いはぐれて」

正解は② ★

「言いはぐれる」も古風な言い方で、最近では「言いそびれる」の方がよく用いられる。「言うべき機会を失って、言わないままになってしまふ」という意味である。

「はぐれる」は他の動詞の連用形について、複合動詞を作ることがある。「食いはぐれる」「乗りはぐれる」のほか、「行きはぐれる」「取りはぐれる」などがある。いずれも、「機会を失って、そのことをしないでしまふ」という意味である。意味を強めて「…っぱぐれる」という使い方もある。一番よく聞くのは「食いっぱぐれる」であろう。「この仕事さえしていれば、食いっぱぐれはない」などという言い回しに触れたことはないだろうか。道端の花のように、気づきさえすれば、身の回りには言葉があふれている。

「言う機会を逃して、言わないままになってしまふ」という意味になる選択肢は②しかない。

(ウ)足が遠くなった

正解は① ★

「足が遠くなる」は「足が遠のく」とも言う。「今まで行っていたところにいなくなる」「寄りつかなくなる」「疎遠になる」という意味で用いら

れる。したがって、正解は①である。

この言葉は現在でも比較的よく使われるので、すぐに正解を選ぶことができるはずだが、文脈からも確かめることができる。直前の五十行目に、「(交友の範囲の違い、仕事も忙しかったので)自然と遠ざかってしまった」という表現があり、それに付け加えるように「(結婚して子どもができ、境遇も前と異なってきたので)一層足が遠くなった」と続いている。この文脈からも、相手のところに行かなくなってしまったということはすぐにわかるはずである。

問2 傍線部の心情を説明する問題

正解は③ ★★

「くすぐる(揶揄)」は、「皮膚を軽く刺激して、むずむずして、笑いたくなるような感じを起こさせる」(大修館/明鏡国語辞典)という意味である。「私」は羽織を着る度に、妻に羽織だけは良いものをあつらえているのが不思議だと言われるのだが、実はW君にももらったものだということを、妻に言いそびれてしまっている。だから、ほめられる度に、嬉しい反面、本当のことを言っていないというやましさを意識させられるので、「むずむずする」ような落ち着かない気持ちになるのである。ここでは、「笑いたくなる」というよりは、「くすぐられてむずむずする」という感覚としてとらえるのがよいだろう。このような「私」の気持ちを的確に説明しているのは、③である。

① 妻は確かに「私」が結婚の折に羽織をあつらえたと信じているし、「くすぐる」には「笑い出したくなる」という意味があるが、「私」と妻の会話からは「私」が妻を笑っているように読み取れない。「私」は自分が妻に事実を告げていないので、妻が羽織をほめたり、不思議がったりする度に、なんとか「誤魔化して」いる。それは妻に正直に話していない後ろめたさがあるからである。

② 「くすぐる」には、相手を「不安にさせる」という意味はない。したがって、その受け身形である「くすぐられる」にも「不安になる」という意味はない。よってこの選択肢は誤りである。

④ 「私」の嬉しさは、妻が自分の服装に関心をもってくれることに対してではなく、貧乏でも羽二重の羽織を持っていて、その羽織をほめてくれるのが嬉しいのである。また、「くすぐる」の意味には、相手を「物足りなくさせる」という意味はない。私は本当のことを話していないので、妻が羽織をほめると落ち着かない気持ちになるのであって、「羽織だけほめることを物足りなく思」ってはいない。

⑤ 「妻に打ち明けてみたい衝動」とあるが、本文にはそのような記述はない。むしろ、打ち明けられなくて誤魔化している。また、「自分を侮っている妻への不満」とあるが、妻は夫が羽織だけ立派なものを持っていることを不思議に思っているが侮ってはいない。袴が揃っていないことに文句を言っているような台詞も、「いかにも惜しそうに」とあるように残念がっているだけで、これを侮っていると解釈するのは行き過ぎである。

問3 傍線部の心情を説明する問題

正解は① ★★

傍線部にある「一種の重苦しい感情」とほぼ同義の表現が、二行前の「或る重い圧迫」である。「私」はW君が同僚から皮肉を言われても、自分のために奔走してくれたことに「感謝の念に打たれる」のであるが、同時にそれによって「重い圧迫を感じ」ている。それは、自分の持ち物の中で最も高価な「羽織と時計」が、どちらもW君からもらったものであり、W君の好意が自分にとっては、嬉しさを通り越して重荷になっているからである。

「羽織と時計」をもらったことに対して、「やましいような気恥ずかしいような」感情を抱くのも、「羽織と時計」が貧乏な自分には似つかわしくないほど高価なものだからで、そのようなものをもらってしまったことが、今更のように重荷に感じられるのだ。

このような「私」の感情を過不足なくまとめているのは①である。

② 「私」は羽織も時計も「必要を感じていなかった」かもしれないが、贈ってくれたことには、「涙ぐましいほどの感謝」を抱いている。その好意が重苦しくはあっても、W君が余計なことをしたとは思っていない。

また、四十三行目に「この意識が」とあるように、私に重苦しい感情を起こさせるのは、私がつけているもので最も高価なものが二つともW君からもらったものだという「意識」なのである。W君が「私」のために周囲から非難されたことに対する申し訳なさなどではない。したがって、この選択肢は誤り。

③ 「W君が羽織を贈ってくれたことに味をしめ」「高価な品々をやすやすと手に入れてしまった欲の深さを恥じており」「W君へ向けられた批判をそのまま自分にも向けられたものと受け取っている」とあるが、これらのいずれも本文には述べられていない内容である。

④ 羽織と時計を「自分の力では手に入れられなかったことを情けなく感じており、W君の厚意にも自分へ向けられた哀れみを感じ取っている」が誤り。「私」が感じる重苦しい感情は、W君の厚意に感謝はあるものの、贈られたものが自分には不釣り合いであるため、W君の気持ちをむしろ重荷に感じるところから発しているのである。「私」は、羽織や時計を自分で買えなかったことを情けなく思ってもいないし、W君が自分を哀れんでくれるとも思っていない。したがってこの選択肢も誤り。

⑤ 「同時にその厚意には見返りを期待する底意をも察知している」が誤り。W君が見返りを求めているれば、「私」はむしろ気持ちが軽くなったかもしれない。W君は見返りなど求めていないし、だからこそ過分な贈り物をくれるW君の気持ちが、私にとって重荷なのである。

問4 傍線部の理由を説明する問題

正解は① ★★

「私」がW君の妻君に対して抱く恐れ of 気持ちは、五十六行目から六十五行目までに記されている。

「私」の空想の中で、妻君の眼が語っているのは、W君はかつて「私」のために奔走し、高価な羽織や時計を贈ったのに、今、病気で生活苦にあえいでいるW君のために私は何もしようとしないうという非難である。そして、「私」がなぜそういう空想をするかというところ、W君を見舞わなくてはならないと思う気持ちがありながら、W君に恩恵的債務を負っているように思う強い自意識のせいで、W君を訪ねることができないからである。だから、無沙汰が続けば続くほど、W君の妻君がW君に向かって「私」を責めているような空想までしてしまうのである。

生活苦にあえいでいるW君のことを思うと、見舞いに行きたいと思うのに足が遠くなってしまい、そのことをW君の妻君に非難されるのではないかという不安が、「私」に妻君の眼を空想させている。このことを最も適切に説明しているのは、①である。

ただし、①の選択肢も、無沙汰に対する非難のみが取り上げられ、W君への援助をしないことへの非難に触れていない点でやや弱い印象を受けるし、「その間看病を続けた」は、W君が病気であるから推測できるとは言え、本文にはW君の家庭のことについては書かれていないので、ひっかかる表現ではある。しかし、他の選択肢の問題点がより大きいので、①を正解とするのが妥当と判断するしかない。

② 後半の、「転職後にさほど家計も潤わずW君を経済的に助けられないことを考えると、W君を家庭で支える妻君には申し訳ないことをしている」とあるのが誤り。六十七行目からの空想で、「私」はW君の妻君か従妹と出会い、訪問するきっかけを得たら、「何か手土産を、そうだ、かなり立派なものを持って見舞に行こう、そうするとそれから後は、心易く往来できらるだろう」と思っている。つまり、「私」が悩んでいるのは、W君を経

済的に助けられるかどうかではなく、W君の見舞いに行けるかどうかなのである。

③ 「私」にも「私」の生活があるので、W君のことを始終考えているわけではない。偶々思い出して、無沙汰をしていると思えば思うほど、自責の念が強くなるのである。「つい忘れてしまう」ことを「ふがいなさ」と感じていたとは、文脈からは読み取れない。また、W君の恩義を忘れまいと思いが、つい忘れてしまうことを、偽善的な態度というのは言い過ぎであるし、そもそも「私」は自分のことを偽善的とは思っていない。したがって、「妻君に偽善的な態度を指摘されるのではないか」という怖さを感じている」は誤り。

④ 「妻君の前では卑屈にへりくだらねばならないことを疎ましくも感じているから」が誤り。「私」がW君の厚意に報いていないことをやましく思ったとしても、それはあくまで「私」の自意識の問題である。仮に見舞いに行ったとしても、妻君の前で「私」が卑屈にへりくだらねばならない理由はなく、したがってそれを疎ましく感じる必要もない。

⑤ 「W君が『私』を立派な人間と評価してくれた」は、本文には書かれていない内容である。また、「私」が自責の念にかられているのは、病気になったW君を見舞いにいかねばと思うのに無沙汰をしてしまうからであって、「自分だけが幸せになっているのにW君を訪れなかったことを反省す」るからではない。

問5 主人公の行動を説明する問題

正解は⑤ ★★

傍線部の私の行動の理由は、直後の一文に書いてある。妻に鮎パンを買わせ、自分は陰ながら家の様子を窺い、偶然のようにしてW君の妻君か従妹に遇おうと期待したのである。しかし、この問題は、傍線部の「私」の行動の理由だけではなく、そうした行動をする背景や行動に伴う心情までも聞こうとしている。行動と理由と心情をつなげる問題であると言える。

このような問題は、本文からあらかじめ答えを考えておいて選択肢を吟味するのではなく、すぐに選択肢を読んで、その内容が本文の内容に合致しているかどうかを吟味するほうがよい。

① 「罪悪感を募らせる」は言い過ぎである。「私」はW君の家族に対して罪の意識を持つてはいない。また、「かつてのような質素な生活を演出しよう」と作家的な振る舞いに及ぶは、「原っぱで子供に食べさせる」「餡パン」のことをさしているのかもしれないが、私が「原っぱで子供に食べさせる」と言ったのは、妻に餡パンを買わせる口実であり、妻に餡パンを買わせるのは、W君の妻君か従妹に遇えるのではないかと思ったからである。したがって、この選択肢は誤り。

② 「その悩みを悟られまいとして妻にまで虚勢を張るはめになっている」が誤り。「私」の行動に「虚勢」を張っているところは見当たらない。また、「私」の行動は、あくまでW君とその家族に対するものであり、妻に対するものではない。したがってこの選択肢も不適切。

③ 「W君に酬いるためのふさわしい方法がわからず、せめて店で買物をすることによって、かつての厚意に少しでも応える」が誤り。傍線部Dでの「私」の行動は、W君の妻君や従妹に偶然のように遇おうという期待を持って行ったものである。パン屋の売り上げに貢献しようとは、ここでは考えていない。第一、子供に餡パンを買ってやるくらいでは、どれほど店には貢献できないだろう。

④ 「W君の家族との間柄がこじれてしまった」とあるが、疎遠になつてはいてもこじれてはいない。「誤解を解こう」とあるが、誰も誤解などしてはいない。「稚拙な振る舞い」はどの行動をさしているのか曖昧である。さらに「身勝手な思い」とあるが、W君の妻君か従妹と偶然遇おうという期待を持つことは、身勝手な思いとまでは言えない。全体的に「私」の行動の背景にある心情の説明にはなっていない。

⑤ 「偶然を装わなければW君と会えないとまで思っていた」「これまで(妻に)事情を誤魔化してきた」「今更妻に本当のことを打ち明けることもできず」「回りくどいやり方で」「様子を窺う機会を作ろうとしている」「いずれの要素も「私」の行動の背景や意図・心情に合致している。したがって、これが正解である。

問6 新傾向 作品に関する資料を読んで設問に答える問題

【資料】宮島新三郎「師走文壇の一瞥」(『時事新報』一九一八年十二月七日)

【資料の要旨】

加能作次郎は今まで生活の諸相を多角的に描いてきた。見たまま有りのまを克明に描写する作家であつて、生活のおけるある一点をねらつて作品を作るといふいわゆる「小話」作家ではなかった。

ところが、「羽織と時計」は小話臭味が多すぎたきらいがある。「羽織と時計」に関心しすぎずに、「私」の見たW君の生活、病氣、それに伴う悲惨な境遇を如実に書いたなら、一層感銘深い作品になっていただろう。ある一つの興味あるねらいを物語るより、忠実なる生活の再現者としての加能氏を尊敬している。

評論と同じく最後の問題は、別の文章を提示し、それをふまえて考えさせる新傾向の問題である。

評論の場合は、生徒がまとめたノートの空欄に入る表現として適切なものを選択する問題だったが、小説は、本文に対する批評を読んで、批評する側の主張の核心となることを考えさせたり、評者とは異なる意見を考えさせたりしている点で、これまでになかった問題であり、思考力・判断力を養うという新しい学力観に沿った問題であると言える。

(i) 傍線部を説明する問題

正解は④ ★★

小説『羽織と時計』では、「羽織と時計」が小説を展開させる重要なモチーフであり、小説の中で起きるさまざまなエピソードを引き起こし、結びつけ、まとめ上げる鍵となっている。確かに、小説中には、妻とのやりとり、退職の記念品、W君の妻君の眼、W君のパン屋を窺う様子などが、時にユーモラスに描かれ、それらは皆「羽織と時計」を軸に展開している。そして、「私」はW君から受けた恩恵を「債務」として感じる自意識ゆえに、W君に会わなければならないと思いつつも、どうしても遇うことができないという「おち」がついている。

宮島新三郎は、このような小説を「小話」とし、加能作次郎は本来そうした小話的作品を書く作家ではないと考えている。しかし、この小説においては、加能は、「羽織と時計」という「ネタ」を面白く使うことに執着したために、本来書かねばならない、ありのままの生活の様をじっくりと描くことができなかったと残念がっているのである。たとえ悲惨なものであっても、「私」が見たまま、ありのままのW君の生活や心情をもっと如実に書いていたなら、作品は一層感銘深いものになっていたと言っている。

このような宮島新三郎の『羽織と時計』に対する批評に合致する選択肢は④である。

① 加能作次郎は『羽織と時計』においてW君の姿を浮かび上がらせることができなかった。したがって、この選択肢は誤り。

② 宮島新三郎は、『羽織と時計』で、加能作次郎が「羽織と時計」に執心しすぎたために、見たまま、ありのままを克明に書くことができなかったと述べている。したがって、「実際の出来事を忠実に再現しよう」と意識しすぎた」は誤りである。

③ 宮島新三郎は、加能作次郎が小説のモチーフとしての「羽織と時計」に執着したために、W君の生活や境遇を如実に書くことができなかったと言

っているものであって、思い出の品に対する愛着が強かったためとは言っていない。そもそも、「私」は「羽織と時計」に愛着を感じているというより、分不相応なものをもらったとむしろ重荷に感じている。したがって、この選択肢も誤り。

(ii) 評者と異なる見解を提示した内容を選ぶ問題

正解は④ ★★

資料で示された批評とは異なる解釈を考えるという、これまでに全く出題されたことのない問題である。しかも、設問中に「羽織と時計——」という表現が繰り返し用いられていることに注目するという条件が示されている。慣れない者は、設問の意図がわからずとまどうかもしれない。

表題以外で「羽織と時計——」が繰り返し返されているのは、四十三行目と五十三行目で、いずれもW君の厚意に感謝はしつつも、それがかえって「私」にとつて重荷となり、W君から遠ざかる原因になったことを語っている場面である。宮島新三郎は、こうした小説の展開を「羽織と時計」への執着の強さと考え、それによって、本来書くことができたはずの、ありのままの生活を描くことができなかったと批判的に捉えた。そこで、この問題では、「羽織と時計」について、宮島新三郎とは異なった解釈ができるとしたら、どのような解釈が可能かを問うている。

① 「かつてのようにW君を信頼できなくなっていく『私』の動揺」が誤り。「私」は自分自身の理由によってW君と疎遠になっているのであって、W君を信頼できなくなっているのではない。むしろ、W君の恩恵に対しては感謝の念を持ち続けている。

② 「複雑な人間関係に耐えられず生活の破綻を招いてしまったW君のつたなさ」が誤り。W君が生活苦に陥ったのは、病気のせいである。また、筆者はW君の生活については断片的にしか描いていないので、W君に「人間関係に耐えられず」という状況があったかどうかはわからない。

③ 「羽織と時計——」の繰り返しは、「私」の心情を表すものであって、W君の思いを表す表現ではない。また、「好意をもって接していた『私』に必死で応えようとするW君」とあるが、W君が「私」に感謝や厚意を持っていたとしても、「必死で応えよう」としているようには読み取れない。したがって、この選択肢は誤りである。

④ 「W君の厚意が皮肉にも自分をかえって遠ざけることになった」という内容は、本文の内容に合致している。宮島新三郎は、こうした展開も、筆者が「羽織と時計」を巧みに用いて、ねらって書いていると考えているが、この選択肢では、「羽織と時計——」という表現の繰り返しに、W君の厚意を恩恵的債務と感じてしまう自意識の強さゆえに、W君を見舞わなくてはと思いながら会いに行けない「私」の切ない気持ちを読み取るべきだと主張している。解釈として十分成り立つ上に、設問の意図に的確に答えているので、これが正解である。

第3問 古文

■ 出典

『栄花物語』巻第二十七「ころものたま」（平安時代）

■ 作者・作品紹介

『栄花物語』全四十巻。宇多天皇（在位八八七―八九七）から堀河天皇（在位一〇八六―一一〇七）までの十五代、約二〇〇年間の歴史を記述している。出来事を年代順に記述していく「編年体」という体裁をとっている。

藤原道長の死までを記した正編三十巻と続編十巻に分かれ、正編は藤原道長の正室倫子に仕えた女房赤染衛門によって書かれたという説があるが、確かではない。いずれにしても、正編は十一世紀初頭頃、続編は十一世紀末から十二世紀初頭にかけて宮廷女性の手によって書かれたと言われている。そ

れは、構成・文体に女流文学の影響を色濃く残しているからであり、各巻に雅な名前が付けられているのも『源氏物語』の流れを汲んでいる。

同時代の歴史を語っている「紀伝体」の『大鏡』とよく比較される。『大鏡』は、おそらく男性の官人の手によって書かれたものであり、天皇家と藤原氏の外戚関係から歴史の真実を読み解こうとする視点を持ち、藤原氏に対し批判的立場をとっているのに対し、『栄花物語』は物語性を重視し、藤原氏、特に道長賛美の記述が多い。

■ 本文解説

『栄花物語』正編 巻第二十七「ころものたま」による。「ころものたま」は、万寿二年（一〇二五年）八月から、同三年九月までの一年二ヶ月の出来事を記述している。

本文は万寿二年八月二十九日に死去した藤原長家の正室（藤原斉信女・ふじわらのなりのぶのむすめ）を、埋葬のため翌月の十五日に法住寺に移したときの様子を描いている。

藤原長家は、道長の六男で当時中納言であった。生涯四人の妻をめぐり、斉信女は二番目の妻で、亡くなる三日前男子を死産し、自らも後を追うように亡くなった。本文は、亡骸を法住寺に移す日とその後埋葬まで法住寺に籠もる長家の様子を描いた部分である。概要は次の通り。

両親、長家らの嘆きは深く、法住寺に到着した後、長家はそのまま物忌みで法住寺に籠もる。太皇太后彰子をはじめ、宮中にいる姉妹からの見舞いや親しい女房達からの見舞いが届くが、はかばかしい返事もできない。「悲しむ心を思いなだめてください」とあった歌に、「思いなだめようがない」と返しつつ、いつか悲しみが薄らぐのだろうかと思うと、それがよけいに長家を苦しめるのだった。

美しく気立てもよく、書や絵にも関心が深かった妻が描いたり集めたりした絵を思い出し、喪が明けて自邸に帰ったら、絵を出して気持ちを慰めよう

と思うのだった。

本文の長さは約九〇〇字。これまでのセンター試験に比べるとかなり分量は少なくなっている。ただし、問5で、和歌を含む文章を比較のために用いており、この文章量が約二〇〇字程度ある。それでも、センター試験に比べると文章量は減少し、問5に用いられた文章も古文ではなく現代文である。古文も最終設問は、本文以外の資料を用いた問題となっており、複数のテキストを用いるという試みを実現する新傾向の問題となっている。

■設問解説

問1【現代語訳（部分）の問題】

(ア) えまねびやらす

正解は④ ★★

「まねぶ」は、「真似をする」という意味がまず思い浮かぶことだろう。前後の意味をつかむことができず、「真似をする」という意味しかわからない場合は、③を選ぶ可能性があるのですが、この問題はかなり難しい部類に入ると言う。

実は、「まねぶ」には、「見聞きしたことをそのまま人に伝える」という意味もある。

【まねぶ】

① 人の言ふらむことをまねぶらむよ。

(オウムは人のいうことをまねるといふよ。)

② かの御車の所争ひをまねびきこゆる人ありければ、

(あのお車の場所争いを(光源氏に)伝え申し上げる人がいたので、)

考えてみれば、「人の言うことをまねをする」とは、「人の言うことをそっくりそのまま言う」ということであるから、「真似をする」も「そのまま伝える」も同じ意味である。

傍線部(ア)では「え…ず」という副詞の呼応があり、「…できない」という意味である。したがって、副詞の呼応で判断して①④⑤に絞れば、正解の④にたどり着けるかもしれない。しかし、③「真似のしようがない」の「しようがない」という表現に「…できない」という意味が含まれると考えてしまうと、やはり③を選んでしまうだろう。③は紛らわしい選択肢である。

しかし、傍線部の前後の状況が把握出来れば、「真似をする」では文意が通らないことがわかるし、また直前の「言へばおろかなり」は「…という言葉では言い尽くせない」という意味であるから、「えまねびやらす」も、「到底言うことができない・表現することができない」という意味に解釈するのが最も自然である。よって正解は④。

①②⑤は「まねぶ」の意味にはない。また②は「え…ず」も正確に訳していない。

(イ) めやすくおはせしものを

正解は③ ★★

「めやすし」(形ク)は「目安し」と書き、「見た目が安らかな状態」を言う。「感じがよい」「見苦しくない」という意味である。基本的な古語なので、しっかり覚えておきたい。

「おはせし」は、尊敬の補助動詞「おはす」に過去の助動詞「き」の連体形がついた形で、中納言が亡き妻を思い出している部分であるから、「おはす」の主語は「亡き妻」である。「…(で)いらつしやった」の意味になる。

「ものを」には、接続助詞と終助詞がある。

① 接続助詞 (逆接) くの

② 接続助詞 (順接) くのだから

③ 終助詞 (詠嘆) くのになあ。だがなあ。

文末にある「ものを」は、接続助詞か終助詞かの区別がかなり難しい。しかし、右の終助詞の訳からもわかるように、たとえば接続助詞であっても、詠

嘆の意味が入っていると考えてよい。「…のになあ」と訳すことを覚えておくといだろう。これらの要素を満たしている訳は③である。

①②⑤は「めやすし」の意味にはない。④は、「見た目」とあるので間違いやすいが、「めやすし」は「感じがよい」という意味であって、「すぐれている」という優劣の判断を伴う訳はふさわしくない。

(ウ)里に出でなば

正解は① ★★

「里」には次のような意味がある。

- ① (山野などに対して) 人家のあるところ。人里。
- ② 自分の実家。
- ③ 田舎。

④ 妻、養子などの実家。

⑤ 育ち。素性。

⑥ (寺に対して) 俗世間。

選択肢を見ると、「里」の意味として適当なものは、①「自邸」と④「妻の実家」しかない。②「旧都」⑤「故郷」は、「里」ではなく、「ふる里」という古語の意味である。

「出でなば」は、ダ行下二段動詞「出づ」の連用形＋強意の助動詞「ぬ」の未然形＋順接仮定条件の接続助詞「ば」。

直訳すると「出たならば」となる。①と④を比較すると、④は「ば」を順接確定条件(原因・理由)として訳している。したがって、正解は①となる。長家は、物忌みで法住寺に籠もっているのので、「出でなば」は、「(法住寺を) 出たならば」ということになる。すなわち、「自宅に帰ったならば」という意味であるから、「自邸に戻ったときには」と訳している①が正しい。

問2 【傍線部の行動の理由を問う問題】

正解は① ★★

例年、古文の第2問は文法問題であるが、今年は出題されなかった。しか

し、問1の語句の意味を決定するプロセスで、かなり文法力を問うている。本来は、取り立てて文法について出題するのではなく、読解や解釈において文法の知識が働くほうが望ましい学習であろう。その意味で、今回の出題は知識の「活用」を意識しているのかもしれない。今後もこの方向に進んで、文法に特化した問題は出題されない可能性が高いのではないかと思われる。傍線部Aの解釈も、語彙力、文法力が必要とされる。直前の「よろしきほどは」も含めて読解する必要がある上に、本文に直接書かれていない行動理由を長家の心情を含めて答えることを求めている。問2にしてはかなり難しい問題ではないかと思われる。

傍線部を含む一文は、宮中の女房達からさまざま消息(便り)が届くという内容で始まっている。長家は女房達からの見舞いの便りに対して、「よろしきほどは、『今みづから』とばかり書かせたまふ」という対応をする。

形容詞「よろし」は、「十分に満足できるほどではないが、悪くはない」という意味を持つので、「並一通り」「普通である」という意味にも使われる。「ほど」は多くの意味を持つが、「身分」「地位」という意味でよく使われるので覚えておきたい。

つまり、「よろしきほど」とは、長家に便りを寄越す女房達の中でも、それほど重要ではない普通の身分の者たちをさしている。そのような相手には、「『今みづから』とばかり書かせたまふ」わけである。

ここでの「今」は副詞である。本来なら、「今」が修飾する述語があるはずだが、省略されている。「今みづから来む。」と「来む」を補うとわかりやすい。副詞の「今」には、「今すぐに」の他に、「近いうちに、やがて」の意味がある。また、「来む」は「来るだろう」だけでなく、「行くだろう」の意味もあり、ここでは後者の意味である。さらに、「今みづから」のあとに「ばかり」とあるが、限定の副助詞で「くだけ」という意味で用いられる。つまり、長家は、普通の身分の女房達には「今みづから(そのうち私のほう

から挨拶に行きましょう」と一言だけ返事を書いたわけである。なぜ、そのような対応をしたのかについては、何も書かれていないが、長家が悲しみに浸っていて、高貴な身分の姉妹たちからの見舞いの手紙にも、はかばかしい返事ができない状態であることが傍線部の二行前にもある。ましてや、並一通りの身分の相手であれば、丁寧な返事を書いている気持ちの余裕がないと考えるのが妥当であろう。したがって、正解は①である。

② 「妻と仲のよかった女房たち」が「よろしきほど」の意味に合っていない。また、「みづから」を「自然と」と訳しているが、古語の「みづから」は「自分から」「自分自身で」という意味でしか使わない。「自然と」の意味になるのは「おのづから」である。

③ 「よろしきほど」を「こころのこもったおくやみの手紙」と捉えている点で誤り。「今みづから」は、そのうち宮中に出るようになったら、会いに行つて挨拶すると言っているのであるから、「表現を十分練つて返事をする必要がある」も誤りである。

④ 長家は「見舞客の対応」はしていない。また、「よろしきほど」を「いくらか時間ができた時」と解釈している点も誤り。

⑤ 「よろしきほど」は「大切な相手」ではない。また、「今」を「今すぐ」と訳し、「お礼の挨拶にうかがわなければならないと考えた」も、物忌みで寺に籠もっていることや、悲しみにくれて宮々への返事も書けない長家が考えることとしてふさわしくない。

問3 【語句や表現が表している意味や効果を問う問題】 正解は① ★★★

ここ数年のセンター試験は必ず表現に関する設問があり、分野を問わず出題されるようになっていた。今回は現代文では出題されなかったが、古文で出題された。表現の問題は、選択肢を読んで、内容と照合していくのがよい。

① 「よくぞ…ける」は、絵も上手だった妻が描いた絵を、枇杷殿（長家の姉。皇太后藤原妍子）に献上したとき、妍子がたいそう興味を持って褒め、絵をお納めになったことを思い出し、「よくもまあ、献上しておいてよかったことよ」と係り結びによつて長家の感慨を強調している。選択肢の説明には矛盾がなく、これが正解である。

② 「思ひ残すことなき」の「思ひ残す」は「思ひ残す」の尊敬表現である。「思ひ残す」は、多く下に打ち消しの表現を伴い、「心残りが無い」「未練がない」という意味を表す。傍線部Bでは、妻の絵を枇杷殿に献上したことを思い、よく献上しておいたことよと、そのことに心残りが無いと言っている。したがって、「妻とともに過ごした日々以後悔はない」という解釈は間違っている。

③ 「それでもやはり」という意味になるのは「さすがに」であり、「まさに」にはそういう意味はない。「まさに」は、「くにするのに任せて」「くので」などの意味を持つ語である。

④ 「よろづにつけて」は、「万事につけて」という意味であるが、ここでは枇杷殿に献上した絵を思い出したことをはじめ、色々なことを思い起こして恋しくばかり思っている長家の気持ちを表している。したがって、絵物語が消失したことに對する「長家の悲しみ」を表しているわけではない。

⑤ 「思ひ出できこえさせたまふ」は、長家が妻のことを「思い出し申し上げなさる」の意で、「させ」は長家に対する尊敬の助動詞である。

問4 【登場人物を説明する問題】 正解は⑤ ★★★

① 大北の方は、亡くなった長家の妻の母であるが、本文中に「おしかへし臥しまろばせたまふ」とある。これは悲しみのあまり、転げ回って泣く様子を表す。したがって、「冷静さを保って人々に指示を与えていた」とい

うのは誤りである。

- ② 「御目もくれて、え見たてまつりたまはず」は、「悲しみの涙で目のま
えも真つ暗になって、とてもお見上げ申すことができない」という意味で
あるが、僧都が見ることができないのは、長家の妻の亡骸というよりは、
法住寺に着いた一行全体をさしている。また、「さて御車かきおろして」
は、車に乗っていた人々を下ろすことを表しているのであって、「僧都が
亡骸を車から降ろした」は誤りである。

- ③ 長家は秋の終わりの色づいた山や鹿の鳴く声に一層心細さを感じたと
はあるが、そのたびに「妻が亡くなったことが夢であってくればよい」
と思ったという叙述はない。

- ④ 「進内侍」の歌の「枕ばかりや浮きて見ゆらん」は、長家が「悲しみの
涙に沈んで、枕ばかりが浮いて見えることでしょう」と、長家のことを想
像して詠んでいる。だからこそ、現在推量の助動詞「らん」が用いられて
いるのである。したがって、「進内侍」が「自分も枕が浮くほど涙を流し
ている」は誤りである。

- ⑤ 長家の妻についての描写はどれも本文の内容に合致する。したがって、
これが正解である。

問5 新傾向【本文中の和歌と千載和歌集の和歌を比較して、それぞれの和歌

について説明する問題】

正解は③・⑥ ★★★★★

古文も最後に、他の文章を用いて比較しながら考察するという新傾向の問
題が置かれている。文章自体は二〇〇字程度で短い、比較するのが和歌で
あるし、しかも、元の本文中にある二つの和歌と関連付けなくてはならない
ので、高校生にとってはかなり難しい問題であろう。

まず、X・Y・Zの和歌の意味は次のようになっている。

X 奥方を亡くしたことは悲しいでしょうが、一方ではご自身の思いを慰め

て下さい。誰でも結局は生きてとどまることができるとは世でしょうか、いい
えそうではありません。（誰もこの世にとどまることができないのです。）
Y 思い慰める方法もないほど悲しいので、世の中が無常であることも今は
知ることができないことですよ。

Z 誰もこの世に生きてとどまることができないけれど、それでもやはり妻
を亡くした今は悲しくなりません。

これらの三首の和歌の意味をふまえて、選択肢の内容を吟味する。

- ① 和歌Xの「悲しさをかつは」という部分に注目すると、長家の悲しみは
もともとだと理解した上で、一方では少しでも気持ちを慰めてほしいとい
う長家への深い同情の気持ちが感じられる。したがって、この選択肢の「悲
しみを深くは理解していない」「ありきたりなおくやみ」「安易に言っ
てしまっている」「誠意のなさ」は、いずれも間違っている。

- ② 和歌Zは、「この世は無常であるとはわかっていても、今はまだ妻を亡
くしたことが悲しくてたまらない」と詠んでいるわけだから、「無常を肯
定することで、悲しみを慰めようとしている」という解釈は当てはまらな
い。よって誤り。

- ③ 和歌Xと和歌Zを正しく解釈しているので正解。

- ④ 和歌の贈答においては、歌を贈られた場合、返歌には、もらった歌の中
の言葉を使うのが定石である。和歌Zは和歌Xの言葉をそのままいくつ
か用いているが、だからといってそれが「悲しみを癒やしてくれたことへの
感謝を表現」するわけではない。逆に、和歌Yは、和歌Xの歌の表現をそ
のまま用いてはいないが、「とまるとき世か」と世の無常を述べた和歌X
に対して、「世の中の常なき」と世の無常について触れており、贈答歌の
体をなしている。また、和歌Xと同じ表現を用いなかったからといって、
それが相手を拒むことにはならない。したがってこの選択肢は誤り。

⑤ 「私の心を癒やすことのできる人などいないと反発」が誤り。和歌Yは和歌Xの言うことを理解しつつも、悲しさが深すぎて、世が無常であることが承知できないと言っているのである。和歌Xに反発などはしていない。また、後半の「長家が他人の干渉をわずらわしく思い、亡き妻との思いの世界に閉じこもってゆく」も間違い。長家は喪に服してはいるが、喪が明けたら自邸に戻るつもりである。亡き妻との思い出の世界に閉じこもるわけではない。

⑥ 和歌Yの歌を詠んだあと、長家は「さあ、どうだろう。悲しみで世が無常であることも今はわからないと言ったものの、自分はまだ分別があるようだ。今でもこうして分別があるのだから、まして年月が経てば、妻のことを忘れてしまうのかもしれない」と思うのだが、そう思うことが情けないので、かえって妻のことを深く思うきっかけになっている。この選択肢は、長家の心情を深く考察しているもので、正解である。

【現代語訳】

大北の方も、個人と縁故のあった人々も、亡くなったときと同じようにまた、何度も床を転げ回るほどの深い悲しみのために泣きになる。このことだけでも悲しく不吉だと言わないで、他に何をそう言えるだろうかと思われる。さて、御車の後に、大納言殿、中納言殿、そのほか縁故の深い人々が徒歩で従われる。悲しいなど普通の言い方では言い尽くせないことで、到底表現し尽くすことはできない。大北の方の御車や、女房達の車などをその後続けた。お供の人々など数知れず大勢であった。法住寺では、いつもの来訪とは違う御車の様子に、僧都の君は涙に目の前が真っ暗になり、とても見上げ申すことがおできにならない。こうして、御車を下ろして、それに続いて人々もおおりた。

さて、この御忌みの間は、誰も法住寺にいらっしやるはずだった。山のほうをぼんやり眺めなさにつけても、木々はいつのまにか自然に色とりどり

に紅葉している。中納言殿は鹿の鳴く声にお目覚めになって、今少し心細さが募りなさる。中納言殿の姉の宮様がたからも、慰めのお便りがたびあったが、ただ今のところは悪い夢をみたかのようにばかりお思いになってお過ごしになっている。月がたいそう明るいのも見ても、思い残すということがないくらい、あらんかぎりの物思いをなさる。宮中の女房たちも、さまざまにお便りをお寄せ申し上げるが、並一通りの身分の者へは、「いずれ私のほうからお会いしてご挨拶しましょう」とだけお書きになる。進内侍という女房が申し上げた歌、

千代までもと契った、その千代は涙の水底に沈んでしまい、その涙の水に枕ばかりが浮いて見えることでしょう。

中納言殿の御返し、

起き伏しに千代もと契った、その契りは絶え果ててしまい、いつまでも
※ 尽きないので枕を浮かせる涙であることですよ。

※ 「尽きせねば」は「尽きせぬはいつまでも尽きないものは」の誤りとする説もある。

また、東宮の若宮の御乳母の小弁の歌、

奥方を亡くしたことは悲しいでしょうが、一方ではご自身の思いを慰めて下さい。誰でも結局は生きてとどまることができ世でしょうか、いえそうではありません。（誰もこの世にとどまることができないのです。）

中納言殿の御返し、

思い慰める方法もないほど悲しいので、世の中が無常であることも今は知ることができないことですよ。

このようにお思いになりおっしやるにつけても、「さあ、どうだろう。悲しみで世が無常であることも今はわからないと言ったものの、自分はまだ分別があるようだ。今でもこうして分別があるのだから、まして年月が経てば、妻のことを忘れてしまうのかもしれない」と思うと、自分ながらそれが情け

なくお思になる。

亡き妻は、何事につけても、どうしてこう優れていらつしやるのかと思うくらい、感じのよい人でいらつしやったのになあ。顔かたちをはじめ、気立てもよくて、字も上手で絵などにもご関心があり、つい先頃まで、熱心につ伏しうつ伏ししてお描きになっていたのになあ。この夏に描かれた絵を、枇杷殿に持ってあがったところ、たいそう興味をお持ちになりお褒めになつて、その絵をお納めになったが、よくもまあ持参したものだったなど、思いを残すことがないくらい物思いをつくされるにつけても、万事につけて恋しくばかり思い出し申し上げなさる。長年かき集めなされた絵物語など、みな火事で焼けてしまった後、去年今年の間に集めなされた絵もたいそう多かった。ので、喪が明けて自邸に帰ったときには、それらを取り出して気持ちを慰めようとお思になるのだった。

第4問 漢文

■ 出典

欧陽脩『欧陽文忠公集』（宋）

韓非『韓非子』喻老編（戦国時代）

■ 作者紹介

欧陽脩（おうようしゅう）一〇〇七～一〇七二

北宋の政治家、文人、学者。字は永叔。号は醉翁・六一居士。唐宋八大家の一人。幼い時に父をなくし、叔父のもとで育った。独学で科挙に合格し、官吏となった。途中政治的に不遇な時代もあったが、後に翰林学士等要職を歴任。科挙試験を監督し、蘇軾を見いだした。また、王安石に対しても当初は熱い期待を寄せていたが、一〇六九年に安石が新法を唱え、これに反対した。一〇七一年に政界を引退して潁州に隠棲し、そこで没した。

少年時代に韓愈の書に接し強く影響を受ける。散文においては古文復興運動の中心的指導者となった。また学者としては、『新唐書』『新五代史』の編纂などを手がけている。

韓非（かんぴ） 紀元前二八〇？～紀元前二三三？

戦国時代の思想家。政治家。諸子百家のうち、法家に属し、その著『韓非子』の中で、いかに権力を維持するかについて、わかりやすい説話を用いて徹底的に説いている。司馬遷の『史記』によると、韓の出身で、後に秦の宰相となった李斯（りし）とともに荀子に学んだとされる。性悪説に立つ荀子が「礼」によって人民を矯正することを説いたのに対し韓非は「法」によって支配するべきであると主張した。

韓非の思想は、すでに法家の商鞅（しょうおう）の思想を取り入れて中央集権化を実現していた秦の始皇帝から高く評価された。始皇帝は韓から使者としてやってきた韓非を取り立てようとしたが、宰相となっていた李斯に妬まれ、毒薬を与えられて自害したと『史記』は伝えている。

法家の考えでは、君主は国家統制を臣下に委ねてはならず、臣下の目には不可解・不気味な存在であるべきで、そのために努めて無作為を装うのがよいとされる。この無作為という考え方は「老子」につながるため、韓非は『韓非子』の中で、老子についても書いている。

■ 作品・本文解説

【問題文Ⅰ】

『欧陽文忠公集』所収の二十二句からなる五言古詩で、「御術」（馬の縦法）についてうたっている。

『欧陽文忠公集』は、一一九六年、南宋の政治家、文学者の周必大（しゅうひつだい）が編纂した一五三巻に及ぶ欧陽脩の作品集である。宋代には木版印刷が進歩し、『欧陽文忠公集』も何度か出版された。世界に十数種現存

するが、そのうちの 하나가日本の天理図書館に收藏されており、国宝となっている。

五言古詩は昨年の最後のセンター試験でも出題されており、二年連続での出題となった。

【問題文Ⅱ】

『韓非子 喻老編』の中に収録されている、趙の襄主（じょうしゅ）が名人の王良に「御術」を学ぶくだりである。「喻老」の「老」は「老子」をさしており、韓非が多くの歴史的イベントや説話を取り上げて老子の教訓を紹介している。

評論から古文までは、本文は単一の文章が出題され、最後の設問で別の文章を組み合わせていたが、漢文は本文が二つの文章で構成されている。いずれにしても、「複数のテキストを用いて多角的な視点で読む」という共通テストの出題方針に沿って作問が工夫されている。文章量は問題文Ⅰが一一〇字、問題文Ⅱが六十六字であった。

■設問解説

設問数は昨年と同じであるが、問2で漢字・語句の解釈の問題が3問出題されたため、第4問全体ではマーク数が二つ増えた。

問1は、漢字の意味の問題だが、読み方が分かれば意味がある程度わかるようになっているので、「読み」の問題と考えてもよい。問2は漢字・語句の意味を問う問題。問3は、二つの問題点が共に「御術」について述べていることに留意して空欄に入る文字を答える問題、問4は返り点と書き下し文の組み合わせの問題、問5は傍線部を解釈する問題、問6は、二つの問題文をふまえた上で、「御術」と御者の説明として適当なものを選ぶ問題となっている。複数の問題文を用いて考えるという点からは、問3と問6が新傾向問題と言えるだろう。しかし、基本的に解き方はセンター試験とさほど違い

はない。本文の内容を読み取れば、それほど悩むことなく正解にたどりつけるはずである。

問1 【漢字の意味を問う問題】

正解は(ア)① ★ (イ)⑤ ★★

「徒」「固」のいずれも頻出する重要な文字である。読みの問題としてもよく出題される。この問題も、まず読み方を考えてみるとよい。(ア)は読み方がわかれば、本文での意味がわからなくても正解は一つしかない。(イ)は、本文での意味を考えなければ間違いやすいダミーの選択肢が入っているので、気をつける必要がある。

読み方は次のようになる。

(ア) 「徒」 ① たたく 「ノミ」 たたくだけだ (限定・累加形)

② いたづらナリ 空しい・むだだ

③ と・ともがら 弟子・門人・仲間

④ かちス 歩いて行く

(イ) 「固」 ① かたシ 堅固だ・しっかりしている

② かたク 確かに・強く

③ もとヨリ もともと・もちろん

④ まことニ まことに・当然・本来

(ア)は「たたく」と読むと、①の「只」が近い意味を持っているとわかる。他の選択肢で「徒」と近い読み・意味のものはない。(イ)は「もとヨリ」と読むと⑤の「本」が、「かたク」と読むと①の「強」が同じような意味を持っている。他の漢字は該当しない。「強」は「強固」という熟語もあるので、迷うかもしれないが、本文では、「此術固已深」の中で使われていて、これは「此の術固より已に深し」と読むべきである。「かたク」と読んだのでは意味が通じない。したがって、正解は⑤となる。

ちなみに「固已」は二〇〇八年のセンター試験にも次のような一文の中で出てきて、「固」の読み方が問われた。

「固より已に其の真に非ず」

「固より已に」という言い回しに慣れておこう。

問2 【漢字・語句の本文中での意味を問う問題】

(1)何

正解は⑤ ★★

「何」は、「なんゾ」と読んで、疑問形・反語形・詠嘆形を作る。疑問形であれば、「どうして〜か」、反語形であれば、「どうして〜か、いや〜ない」、詠嘆形であれば「なんとまあ、〜ことよ」という意味になる。まず、選択肢の中で該当するのは④と⑤である。

ここで本文を見て、自分が所有する千里の馬がいかに素晴らしいかを第六句まで続けていることを読み取りたい。そうすると、疑問形・反語形ではなく、詠嘆形として、「(その馬の)毛並みと骨格はなんとまあ、ひきしまつて美しいことよ」と訳すのが適当であることが理解できるはずである。したがって、正解は⑤。

(2)周

正解は③ ★★

「周」は、「あまねク」と読み、「すべてに広く行き渡る」ことを意味する。本文では「九州周く尋ねべし」と用いられており、これは「九州(中国全土)を広くどこでも尋ねることができ」という意味である。「広くどこでも」という意味の選択肢は③しかない。

「あまねク」という読み方が思い出せない場合、「周知する」「周遊する」などの熟語を思い浮かべると、「周」の意味が推測できるかもしれない。

(3)至哉

正解は④ ★★

「至哉」は、「詠嘆形」で「至れるかな」と読む。ここまでのところで、

千里の馬が早く走ること、遠くまで駆けること、山や林を上がり下りすること、乗り手と気持ちが通じていることが述べられているので、選択肢の①②③⑤は、それらの内容を受けたものであろう。

しかし、「至哉」が用いられている第十四句は、その一句で意味が完結していない。第十四句は第十五句と続けて読んで初めて意味をなすのであり、「至哉」は、後ろに続く「人と馬、両楽不相侵」に対して詠嘆の気持ちを表しているのである。

「人と馬、両楽不相侵」は、やや解釈が難しいかもしれないが「両楽」は「人と馬の両方の楽しみ」の意味で、「人と馬は互いに相手の楽しみを侵さない(邪魔をしない)」となり、人と馬がそのような境地になれることに對して「至れるかな」と感嘆しているのである。したがって、正解は④である。

問3 新傾向 【問題文Ⅰの空欄を、問題文Ⅱから適当な字を選び補充する問題】

正解は② ★★

空欄を補充する文字を、異なる文章の中から探す問題で、確かに複数の文章を活用するという点では新傾向ではある。しかし、傍線部Aの解釈ができれば、空欄に入る文字が選択肢として示されていれば補充は可能である。これまで選択肢として与えられていたものが、問題文Ⅱの中に示されているだけなので、従来の問題とさほど変わらないとも言える。

確かに、二つの問題文はどちらも「御術」についての文章で、「人と馬」の気持ちが通い合っていることの大切さを述べているので、文章の内容がわかったほうが補充しやすいとも言えるが、設問自体長くて意図を理解するのに時間がかかる上、これまでなら文字だけが選択肢として並んでいたものが、問題文Ⅱの中に埋もれているわけであるから、時間がかかるだけのような気もする。

複数の文章を活用するという目的が一人歩きしていないか、本当に思考力を試す問題になっているかどうか、やや疑問が残る。

傍線部Aは、七句の「馬」と八句の「吾（人）」が対比されているので、「馬には四本の足があるが、遅く走るか、早く走るかは、私の（ ）にある。」という意味になる。この（ ）の中に、問題文Ⅱの中の傍線部(a)～(e)の文字を当てはめていけばよい。

- (a)体 (b)心 (c)進 (d)先 (e)臣

こうして選択肢を並べてみると、答えは(b)の「心」であることが見えてくるにちがいない。問題文Ⅱの「心」の前後の意味も、「およそ御術において大切なことは、馬の体が車にしつくりと合い、人の心が馬の気持ちと調和していること」が大切であると書かれている。この内容からも、空欄Xに入る漢字は「心」しかない。よって正解は②である。

問4 【返り点と書き下し文の組み合わせの問題】

正解は④ ★★

「所」は代表的な返読文字で、しばしば「所欲」の形で出てくる。「新明説漢文」の返読文字の一覧(35ページ)にも、次のような例文が出ている。

魚^ハ 我^ガ 所^レ 欲^{スル} 也。 魚肉は自分の欲しいものである。

選択肢の中で、「欲する所」と読んでいるのは③と④であるが、③のように読むならば、「惟だ欲する所を意ひ」と「適きて」は切って読む必要がある。「意ひ適きて」と続けて読むのは、漢文の読み方ではない。「惟だ、望む所を思つて、そして行つて」では文としても意味をなしていない。したがって、③は誤りである。

それに対し、④は、「(東西南北、山や林は、)惟だ気持ちの行こうする所であつて」の意味となり、訳も適切である。従って正解は④である。

問5 【傍線部を解釈する問題】

正解は⑤ ★★

「後則く先則」の形は、漢文の学習では、誰もが一度は学んでいるはず

である。次の諺が特によく知られている。

「先んずれば則ち人を制し、後るれば則ち人の制する所と為る」

(『史記』項羽本紀)

傍線部Cは「後」と「先」が逆になつてはいるが、句形としては同じものである。「逮」の字は本文中にふりがながないので、読むのは難しいかもしれないが、選択肢を見れば、「追いつく」という意味であることが推測できる。「臣」は「私」の意味である。

そこで、傍線部Cは、「今あなたは、後れたら私に追いつこうとし、先に行けば私に追いつかれまいとする」という意味になる。これに矛盾していない訳になっているのは、⑤である。

ちなみに「逮」は「およぶ」と読む字で、傍線部Cを書き下すと、「今、君、後るれば則ち臣に逮ばんと欲し、先んずれば則ち臣に逮ばれんことを恐る。」となる。

問6 新傾向 【二つの文章をふまえて主題を把握する問題】正解は③ ★★

問題文Ⅰ、問題文Ⅱに共通することは「調和」「調(かな)う」ということである。馬と人と気持ちがそろっていることが大事だと言っている。

たとえば、問題文Ⅰでは、「六轡は吾が手に応じ、調和すること瑟琴のごとし」「至れるかな、人と馬と両楽相侵さず」とあり、問題文Ⅱでは、「人心馬に調ひ」「尚何を以て馬に調はん」と言っている。

このような馬と気持ちを合わせて一体となることができなければ、名人と言われる御者にはなれないということを的確に言い表しているのは、③である。

① 「王良のように車の手入れを入念にしなければ」が誤り。そのような記述はない。

② 「馬車を遠くまで走らせること」で優れた御者になるのではなく、優れ

た御者だから馬を遠くまで走らせることができるのである。また、「王良のように馬の体調を考えながら鍛え」とあるが、そのような記述はない。

④ 「馬を厳しく育て、巧みな駆け引きを会得する」は本文にない内容である。また、「王良のように常に勝負の場を意識しながら馬を育て」は、王良が述べていることとは反対の内容である。王良は、勝負のことばかり考えていたら、馬と気持ちを合わせるなどできない。それではいつまでも勝つことはできないと言っている。

⑤ 「訓練場だけでなく」とあるが、訓練場のことはどこにも書かれていない。また、「山と林を駆けまわって手綱さばきを磨くことも大切」も本文の内容とは合致しない。「襄主のように型通りの練習をおこなう」とあるが、襄主の問題点は、王良のことばかり気にしていたことであり、型通りの練習をしていたとは書かれていない。

【書き下し文】

問題文Ⅰ

吾に千里の馬有り 毛骨何ぞ蕭森たる
疾く馳すれば奔風のごとく 白日に陰を留むる無し
徐ろに駆ければ大道に当たり 步驟は五音に中たる
馬に四足有りと雖も 遅速は吾が心に在り
六轡は吾が手に応じ 調和すること瑟琴のごとし
東西と南北と 山と林とを高下す
惟だ意の適かんと欲する所にして 九州周く尋ねべし
至れるかな人と馬と 両楽相侵さず
伯楽は其の外を識るも 徒だ価の千金なるを知る
王良は其の性を得たり 此の術固より已に深し
良馬は善馭を須つ 吾が言箴と為すべし

問題文Ⅱ

凡そ御の貴ぶ所は、馬体車に安んじ、人心馬に調ひ、而る後に以て進むこと速やかにして遠きを致すべし。今君後るれば則ち臣に逮ばんと欲し、先んずれば則ち臣に逮ばれんことを恐る。夫れ道に誘めて遠きを争ふは、先んずるに非ざれば則ち後るるなり。而して先後の心は臣に在り。尚ほ何を以て馬に調はん。此れ君の後るる所以なり。

【現代語訳】

問題文Ⅰ

私は千里の馬をもっている
馬の毛なみと骨格はなんと引き締まって美しいことよ
速く走ると疾風のようにで、
白日の下にもかかわらず（速すぎて）姿を止めることができない
ゆっくり駆けると大きな道のようにで、馬が駆ける音は五音当たる
馬に四本の足があると言っても、遅く走るか速く走るかは私の心次第である

手綱は私の手にびたりと合い、瑟と琴のように調和している
東西と南北、山と林を上ったり下ったりする。

（それらは）ただ、（私の）気持ちが行こうとする所であって、
中国全土、あらゆる所を尋ねて行く

このような境地にまで到達できるものなのか、人馬は両方ともその楽しみを
侵犯しない

伯楽は馬を外から見ただけで、その馬が千金の価値があることがわかった
王良は其の馬の性格を見抜く名人で、すぐに馬を把握できたが、もともとそ
の御術はすでに深いのである

よい馬はよい御者を待っている
私の言葉をいましめとしてほしい

問題文Ⅱ

およそ馬を操るのに大事なことは、馬の体が車にしっくりと合い、乗り手の気持ちと馬の気持ちにぴったりと合うことであって、そうやってこそ、速く進んで遠くまで駆けることができます。

今、あなたは私の後になると、私に追いつこうとし、私の先になれば、私に追いつかれることを恐れます。いったい、馬を道に進ませて、遠くまで競争するのなら、先に行くのでなければ、後れることになる。そのように先になつたり後になつたりすることは当然と私は思っています。それなのに、あなた様は私のことばかり気にしています。それで、どうして馬と気持ちを合わせる事ができるでしょうか。これがあなた様が負けた理由です。

(令和三年一月二十八日)

本分析資料のほか、他教科・
他科目の分析資料(PDF)
もダウンロードできます。



 **第一学習社 広島本社**
広島市西区横川新町七番一四号
TEL 〇八二二三四一六八〇〇